

# 高大連携活動に参加した入学生の入試成績と学業成績

大久保 貢、都司 達夫（福井大学）

高校生の資質をいかにして伸ばしていくかという教育内容への支援を視野に入れた高大連携活動に参加した入学生の追跡調査を行った。その結果、入試成績ではAO入試の平均成績より高大連携活動に参加した志願者の平均成績の方が上回っていた。また、入学後の学業成績はAO入試入学生の中で高大連携活動に参加した入学生の方がやや優位であり、また学習に対して意欲を持ち、しかも明確な目的意識を持って学生生活を過ごしている情報が得られた。

## 1. はじめに

福井大学では大学教育においてより強く学問に動機付けられ、より高度な学ぶ力を習得できる能力を持つ人材を選抜するAO入試を平成13年度入試から導入している。AO入試を実施することのメリットの一つは受験生、大学が相互理解を深めることによる明確な目標、目的意識を持った学生が入学することと、学力試験では測ることのできない多様な資質（問題解決能力、論理的思考力、知的好奇心、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、自己表現能力など）を発掘し、学内を活性化させることである。そのために受験生に大学の教育・研究などの情報や望ましい学生像を大学側が積極的にアピールする必要がある。このことによりAO入試の受験生だけでなく、一般入試の受験生に対しても不本意入学や入学後のミスマッチの解消が期待できる。このような観点からアドミッションセンターが中心となって積極的に高大連携活動に取り組んでいる。

本稿では高大連携活動に参加した入学生を対象として、AO入試の成績、学業成績

の追跡調査や学生生活の意識調査を行った結果に基づいて、高大連携のあり方、またその有効性について論ずる。高校生時代に高大連携活動に参加した学生の集団を特定して、入学後のこのような各種調査を行った報告例はあまり見受けられない。本研究により、新しい形の高大連携の有効性を示す情報が得られた。

## 2. 高大連携のねらい

福井大学におけるこれまでの高大連携は出張講義やオープンキャンパスなど、できるだけ大学での教育内容や教育環境の情報を伝えることにより高校生を刺激する情報伝達型の連携を実施している。しかしながら、これらの高大連携は高校と大学の接続を巡る目まぐるしい環境の変化に双方が十分に対応できないまま一方的かつ単発的なものが多く、一時的な刺激になっても持続的で一貫性のあるプログラムにはなっていないのが現状である。そこで、このような現状に注目して長期的視野にたって継続的に高大連携を実践することより持続的で一貫性があり、しかも高校生の資質をいかに

して伸ばしていくかという教育内容への支援を視野に入れた新しい形の高大連携活動に取り組んでいる。

大学では上述の多様な資質を学生に求めている。しかしながら、これらの資質を現行の高校現場で育成することは困難である。高校では授業内容の縮減や授業時間の減少のため、今まで実施してきた実験や実習といった体験型の授業内容が削除されているのである。それゆえ新しい形の高大連携活動による高校生の教育内容への支援を視野に入れた取り組みの必要な根拠がここにある。新しい形の高大連携活動は文部科学省の高大連携事業：サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業（SPP事業）や工業高校の課題研究に対するコンサルテーションとして実施している。具体的実施方法は高校生が約2ヶ月間に3回程度大学に来て、研究テーマの講義、研究の実施、研究成果発表会などの活動を行っている。この活動のねらいは高校生が大学の専門教育を体験することにより、学習意欲を喚起し、問題解決能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などを育成・支援することである。

### 3. 高大連携の成果

新しい形の高大連携活動として、平成15年度からSPP事業を実践している。平成15年度：工業高校3校と2テーマ、平成16年度：普通高校2校と2テーマ、平成17年度：工業高校5校と普通高校2校で2テーマを実践した。これらの実践に対する成果を以下に示す。図1. にSPP事業に対する高校生の感想を示した。以下の項目に対して「全く感じなかった」を1、「あまり感じなかった」を2、「どちらとも言えない」を3、「少し感じた」を4、「強く感じた」を5と数値化して集計した。この図から新しい形の高大連携活動により高校生に学問の

興味と関心を持たせ、知的好奇心やチャレンジ精神を喚起したことが分った。また、参加者からの感想（自由記述）から大学の講義を受けたりして研究者として将来何が必要か、高校で今何をしておかなければならないのかが分り、日頃の学習意欲を向上させたことが明らかになった。

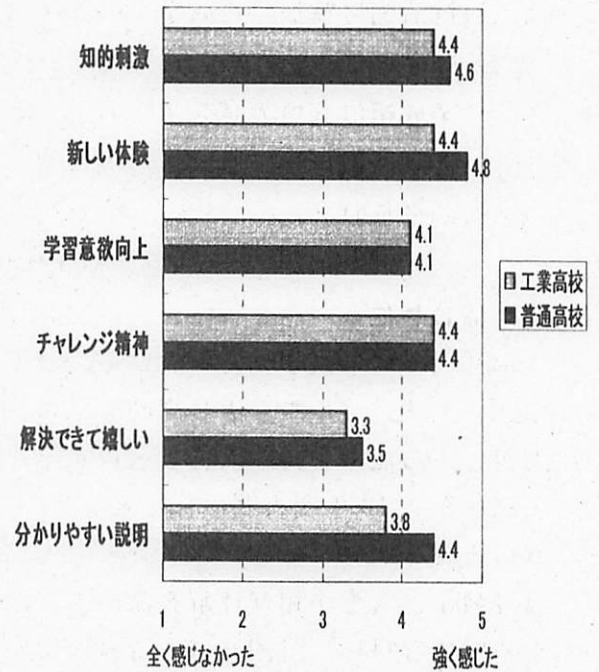


図1. SPP事業に対する高校生の感想（1）

図2. 図3. にSPP事業に対する高校生の感想を示した。以下の項目に対して、図1. と同様な方法で数値化して集計した。これらの図から参加した生徒は新しい高大連携活動により問題解決能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力などの重要性を認識した事が分った。また、この事業により高校までの学び（受け身型の学習）と大学における学び（自分で問題を探し解決する学び）の違い感じ取っていることが明らかになった。そして参加した生徒の中から明確な目的意識を持った本学AO入試志願者が現れ、合格し入学した。これらのことは高大連携活動の体験と交流の成果でないかと考える。

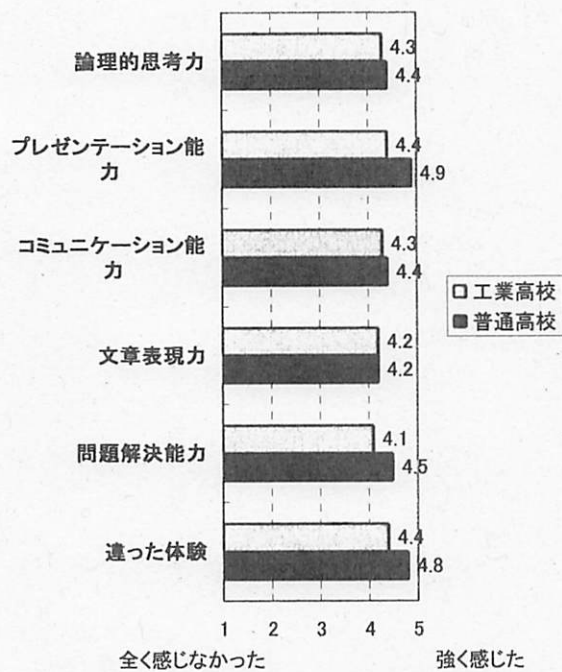


図2. SPP事業に対する高校生の感想 (2)

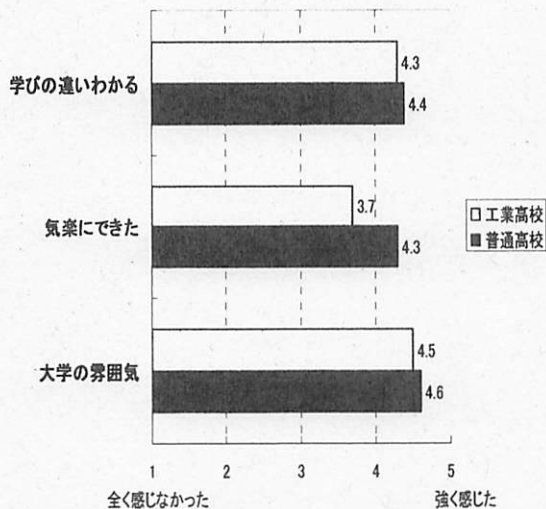


図3. SPP事業に対する高校生の感想 (3)

#### 4. 高大連携の有効性の検証

この高大連携活動の有効性を検証する有力な手段として、高大連携活動に参加した入学生を対象としてAO入試の成績、学業成績の追跡調査や学生生活の意識調査を行った。

##### (I. AO入試成績)

表1. 高大連携参加者のAO入試における志願者数、合格者数

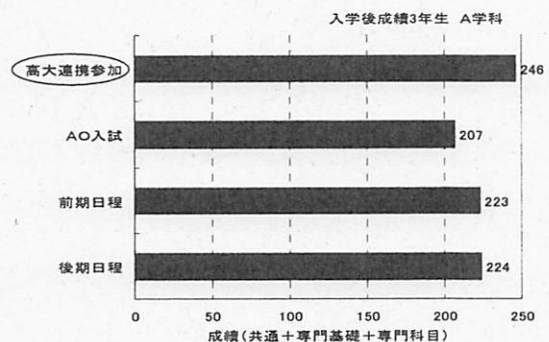
	志願者	合格者
平成16年度入試	7	6
平成17年度入試	3	2
平成18年度入試	27	18

表1. に高大連携活動に参加した生徒のうち本学AO入試の志願者数、合格者数を示す。平成16年度入試7名(SPP事業:6名、課題研究のコンサルテーション:1名)、平成17年度入試3名(SPP事業)、平成18年度入試27名(SPP事業)が本学AO入試に志願し、合格者は表1. のとおりである。この3年間の合格率は約7割以上であった。また、入試成績は平成16年度では3試験区分のうち2試験区分でAO入試の平均成績より高大連携活動に参加した志願者の平均成績の方が上回っていた。また平成17年度では2試験区分のうち2試験区分で、平成18年度では10試験区分のうち7試験区分でAO入試の平均成績より高大連携活動に参加した志願者の平均成績の方が上回っていた。

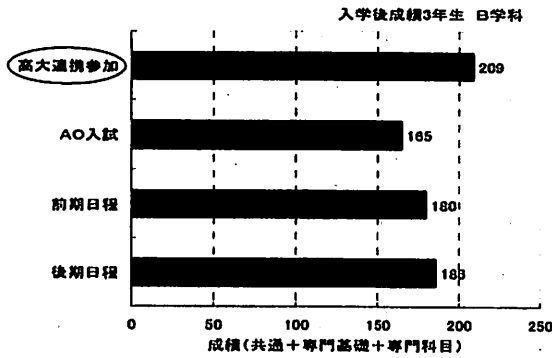
##### (II. 入学後の学業成績)

次に高大連携活動に参加した学生の学業成績の追跡調査を実施した。図4. に学業成績の追跡調査結果を示す。

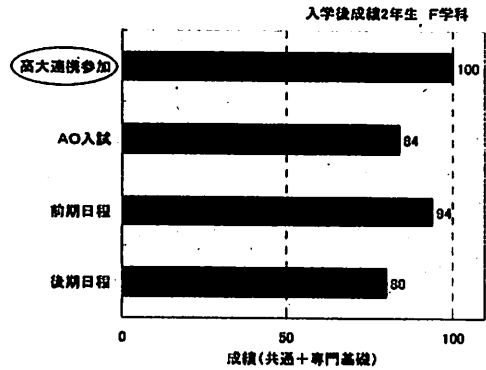
#### 学業成績(A学科)



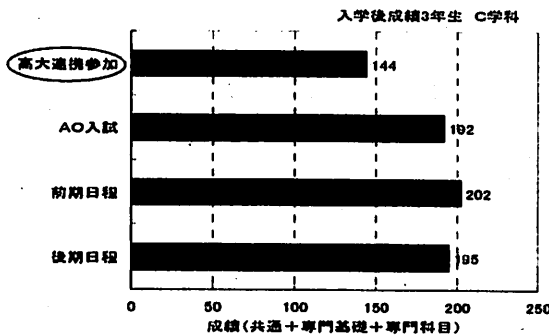
学業成績(B学科)



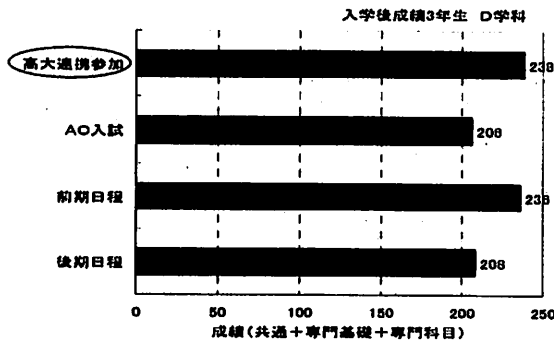
学業成績(F学科)



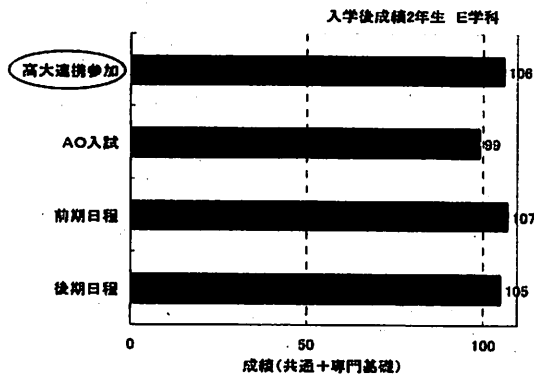
学業成績(C学科)



学業成績(D学科)



学業成績(E学科)



高大連携参加：高大連携に参加した学生の平均成績。成績は優：3点、良：2点、可：1点として、各科目の取得単位数に乗じて得た積の合計の平均成績。A～D学科は入学後2年間、E、F学科は入学後1年間の学業成績。各学科の調査対象の人数：A学科（高大連携2名、AO入試23名、前期日程42名、後期日程14名）、B学科（高大連携1名、AO入試14名、前期日程28名、後期日程26名）、C学科（高大連携2名、AO入試15名、前期日程37名、後期日程16名）、D学科（高大連携1名、AO入試20名、前期日程31名、後期日程22名）、E学科（高大連携1名、AO入試20名、前期日程38名、後期日程20名）、F学科（高大連携1名、AO入試13名、前期日程27名、後期日程29名）。

図4. 学業成績の追跡調査結果

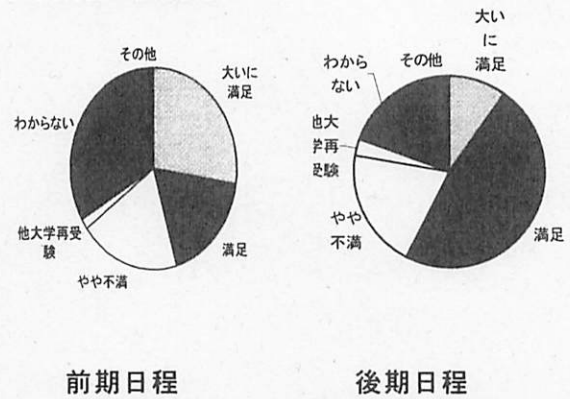
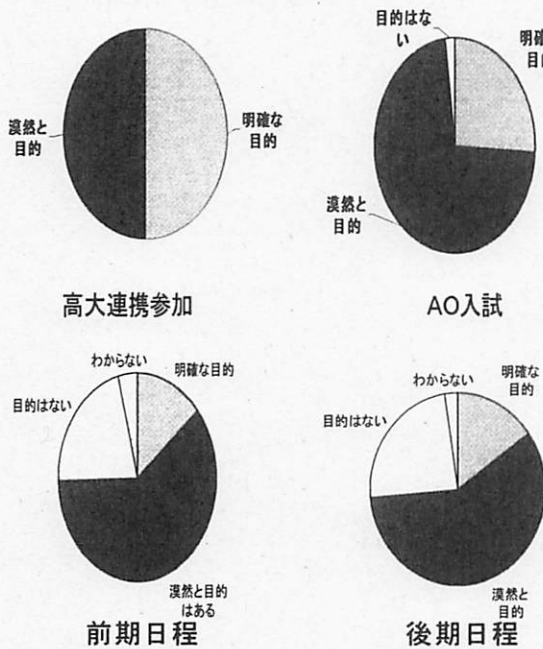
図4から入学後1年間および入学後2年間の学業成績を追跡調査した結果、高大連携活動に参加した入学生の平均成績はAO入試、前期日程、後期日程入学生の平均成績よりやや優位であることが分かった。

(Ⅲ. 学生生活の意識調査)

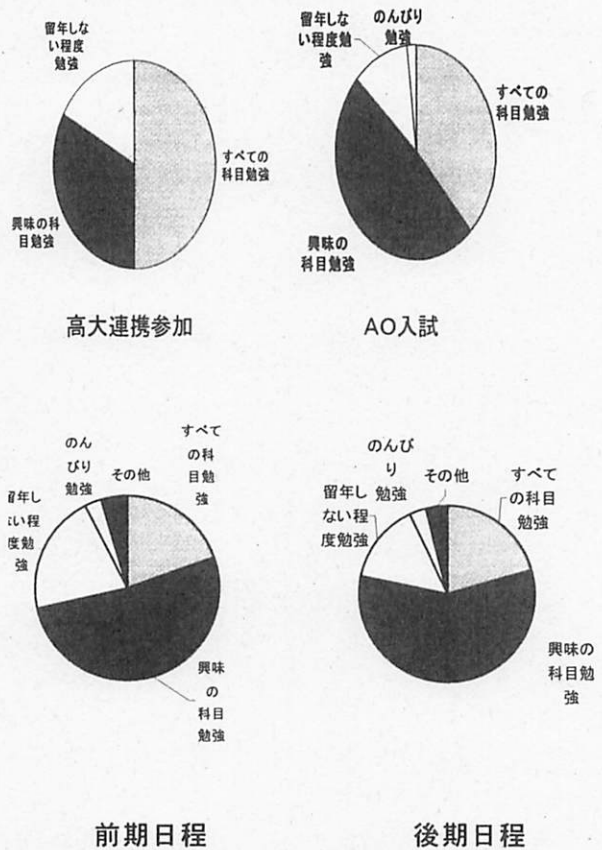
学生生活の意識調査を行った結果を図5. に示す。新入生を対象とした学生生活の意識調査は、すでにAO入試入学生と前期日

程、後期日程入学生の比較から、AO入試入学生は入学目的や動機など意欲的な側面が見受けられたことを報告した[1]。ここでは高大連携活動に参加した入学生とAO入試入学生、前期日程入試入学生、後期日程入試入学生について比較を行った。その結果、目的意識、学生生活の満足度、入学後の学習状況の項目で高大連携活動に参加した入学生の方がAO入試入学生、前期日程入試入学生、後期日程入試入学生より積極的に取り組む意欲がありポジティブな情報が得られた。

「目的を持って入学されましたか」



「本学での勉学について、どう思う」



「本学の学生となった満足度」

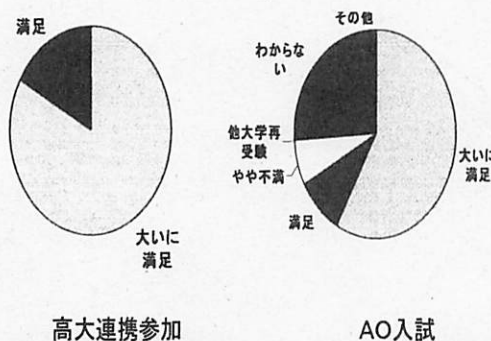


図 5. 学生生活の意識調査

これらの結果を素直に受け取る限り、高大連携活動に参加した入学生は好ましい特性をもつ集団といえる。そして、新しい形の高大連携活動の有効性を支持する根拠となるだろう。さらには、これまでに報告[2]されているように、AO入試で測られる問題解決能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力などが入学後の学習に貢献する推測も可能と考えられる。また、この考え

が正しいとすれば、高大連携活動の難点である「コスト」をめぐる議論に影響が及ぶと思われる。もし、高大連携活動の時間的、人的、経済的コストが高い分、入学後の教育コストが抑えられるならば、高大連携活動のコストの批判は抑制され、議論も深みを増すことが考えられる。今後の課題として毎年高大連携活動に参加した学生の追跡調査を行い、大学教育の後半部分での専門教育の成績や4年次の卒業研究における指導教員による評価調査や大学院進学の実績など多面的な観察によって情報を蓄積していく必要がある。

以上のように高大連携活動に参加した学生を追跡調査した結果、入学後の学習に対して意欲を持ち、しかも明確な目的意識を持って学生生活を過ごしている情報が得られた。これらのことより高大連携と密接に関連したAO入試は大学が求める学生を獲得する方法として有効である可能性が高いと考える。

## 5. まとめ

高校生の資質をいかにして伸ばしていくかという教育内容への支援を視野に入れた高大連携活動に参加した入学生の追跡調査を行った。その結果、入学後の学業成績はAO入試入学生の中でやや優位であり、また学習に対して意欲を持ち、しかも明確な目的意識を持って学生生活を過ごしていることがわかった。これらのことは高校生の時から日々の学習の先にある大学での学問の一端を体験させることの効果であり、高大連携活動の有効性を示すものである。そして、高大連携と密接に関連したAO入試は大学が求める学生を獲得する方法として有効である可能性が高いと考える。今後これらの情報を蓄積して高大連携活動が入学後の学習への移行に貢献する有効性について検証していきたい。

## 文献

- [1] 大久保 貢、都司 達夫 福井大学AO入試入学者の学業成績・学生生活「国立大学入学者選抜研究連絡協議会 第26回大会研究発表予稿集」 77-82 (2005年6月)
- [2] 渡辺哲司 AO入試と大学における学習「大学教育学会誌」 第27巻 第1号 146-151 (2005年5月)